学園ニュース

富山大学

NO.35

編集 学園ニュース編集委員会　発行 富山大学　　昭和56年 3月15日

卒業生諸君に

——職業のもつ倫理について——

人文学部長　本田　弘

人は日日働いている。人間が生きていると言いうるのは，日日休みなく働いているからである。それは，心臓が鼓動している，呼吸が行われているということと同じ意味においてではない。人間の働きは，それ自体において，自覚的であるし，働くかぎりにおいて生きているというところに，人間の特質がある。

例えば，定年制のことが今日問題となっている。しかし，定年制という社会制度は，定年以後働かなくともよいことを意味してはいないであろう。また定年後なお人が職を求めるのは，単にお金を得たいということだけによるものでもなかろう。働くことの中に喜びがあり，生きがいが感ぜられるからである。この点から見れば，社会保障制度の一層の整備充実を図ることも大切だが，働くことが生涯保障される社会制度を確立することの方がより大切な問題だと言わなければならないのである。

ところで，働くということは，生活に即して考えれば，それは，職業をもつということになる。しかも職業は，それに従事する人にとってはまた生活の糧を得るための手段であるかもしれない。しかし，職業は，更には他の人人の生活・生存を支えるという役割を担っている。大工は，家を建てることにおいて，医師は病気を癒すことにおいて報酬を得ている。しかし，新しい家に住む人は，そこに住みえた喜びを感ずるはずだし，健康を回復した人は，健康であることを大事にしながら，日日の営みに励むであろう。

以上のごとく見てくれば，営利の追求は，深く倫理に支えられてのものであることが自ずから明らかになるはずである。そして職業がかような倫理に支えられていることは，ヨーロッパにおいて，16世紀頃すでに言われていた。足利幕府の終わり近く，斉藤道三で知られる戦国時代の頃である。隣人愛に結びついた公共の福祉の思想が資本主義の繁栄をもたらしたというものである。人類の歩みの中からかような面を剔抉した人として，マックス・ウェバーがあることは，卒業生諸君もまたよく承知していることであろう。しかし，科学技術と分業とが著しく進んだ現代社会において，多くの職業からこの倫理が失われ，職業が単に営利の追求のみに堕してしまっていること，そしてそこに今日の人類がかかえる最も恐ろしい危機の存在することもあわせて指摘されている。

自分が携わる職業が，社会にとってまた自分の人生にとってどんな意義をもつのか，そのことを顧みることなく，ただ賃金のためだけに働くことの中に，生きがいや幸せがあるはずはなかろう。しかし，かような事態は，技術化と分業とが益益進みつつある今日一層顕著であることも，また残念ながら確かなことである。

それだけに，これからの自分の人生を築いていこうとする卒業生諸君の前途は嶮しく，困難もまた大きいと言わなければならない。しかしながら，困難がいかに大きく　そこに様様な曲折が存するとしても，自分に妥協することなく，諸君の従事する職業がどのような仕方において庶民一人一人の生活と結びついているかを的確に見極め，思いをそこにも寄せながら，知識を豊かにし，技を磨くことにたゆまず励まれることを，私は卒業生諸君に期待している。

〔本稿は，昭和56年1月15日発行の富山県中小企業家同友会機関紙「富山同友」（第6号）に掲載し，また中小企業家同友会全国協議会機関紙に転載されたものを一部加筆修正したものである。〕

ご健闘を祈る

教育学部長　大沢欽治

卒業生諸君は，将来教師になろうと志して教育学部に入学され，以来四か年の間に，学問研究や教育実習などの修業を積まれ，ここに螢雪の功なって，いよいよ学窓を巣立っていかれることになりました。

私は満腔の祝意をこめて＜おめでとう＞と申し上げます。諸君の胸中はさぞかし感慨深いものがありましょうが，それにもまして御両親のお喜び如何ばかりかと推察いたします。

さて，現今の世界情勢は相変わらず激動しつつあり，平和に向って未だ前途多難な様相を呈しています。経済大国にまで成長した日本は今や世界の驚意のまとになりましたが，これがまた様々な問題をひき起こしています。教育の分野においてもその例外ではないでしょう。教育現場においては，価値観の多様化から生ずる各種の問題，生徒の非行の低年令化，進学競争の過熱化など多くの問題をはらみつつ，次の世代に向って大きな波動を描きつつ進行しているように思われます。この中にあって，若く，新しい感覚に生きる諸君が中核となってリードしていくことが以前にも増して求められることでしょう。

諸君一人一人の心には，それぞれ個性豊かに描かれた人間像，教師像があるに違いありません。私自身の体験から追憶すれば，それは茫漠とした夢か幻のようなものでありました。しかし，それは還暦を迎えるこの年令になっても，なお固定化し，形式化することの不可能なものであります。

最近，西ドイツの現代に生きる著名な教育哲学者で，本学にも何度かお迎えした，O.F.ボルノー博士の「教員養成の理論と実際」と題する論文に接しましたが，その中で「教師たるものは，彼のすべての伝えるべき知識と熟練を超えて，一人の人間性への教育者であるときにのみ彼の天職の課題を果たすのです。人間たちをうつろな動物的存在の状態から目覚めさせ，人間にふさわしい自由な生活へ導くのが彼の大きな目標です」と述べられ，さらに，プロイセンに古くから伝わる教員養成上の合言葉＜実践から得られる，実践のための理論＞ということの大切さを力説しておられます。つまり教育研究が教育実践研究と純粋な学問研究との二重性をもたなくてはならないことを示しているのです。＜教えることは，学ぶことである＞とか＜学ぶ教師こそ，学ばせる教師である＞などという名言を思い出し，諸君と共にこれらの言葉を座右の銘として実践し研究していきたいと念願しています。

終わりに，卒業生諸君の全員が揃って教壇に立てない現状を思うとき心痛む思いがいたしますが，そのチャンスに恵れない人は，隠忍自重して，時期が到来するまで，初志を貫徹する気構えを持たれ，これを自己試練の糧と心得て＜禍を転じて福となす＞よう重ねて念願いたします。必ずや諸君の将来に新しい運命が拓け，発展への芽が出て，さらには＜めでる＞に価する何かが開発されることでしょう。

卒業生諸君の健闘を祈りつつ，重ねて心から＜おめでとう＞を申し上げます。

卒業生に望む

経済学部長　山崎佳夫

諸君の卒業を心からお祝い申し上げます。諸君の御父兄もさぞ御満足のことと思います。

さて，経済学部を卒業する諸君にとって，在学中の思い出は様々であろう。4年間はある人にとって短く，他の人にとって長く感じたかもしれない。ある人の学生生活は，内容の濃いものであったかもしれない。他の人の学生生活は，空虚なものであったかもしれない。しかし，諸君の学生生活は，積極的な意味においても消極的な意味においても，諸君にとって意義があり成果があったものと解される。

というのは，第1によく言われることだが，卒業式を英語でCommencementという。それは始まり（beginning）を意味する。卒業式はひとつの区切りであり，反面ひとつの出発であるからである。諸君は，良

かれ悪しかれ，永い人生の第1章を終えたにすぎない。第2章は第1章をふまえて作成されるであろう。第3章は，さらに第1章および第2章をふまえて作成されねばならない。諸君の過去は戻らないけれども，過去のことを教訓として，諸君は永い将来に向って先に進むことができる。人生の勝敗は，諸君が最後の章を書き終えた時に判定される。諸君の輝かしい人生はこれからである。

第2に，大学において諸君に対する評価は，主として学業成績というひとつの基準によったということである。しかも，それすら必ずしも完全とはいえない。およそ人間の評価は，全体的・包括的でなければならない。大学では，諸君を全人格的に評価する術をとらないのである。しかし，諸君がこれからスタートする社会における評価には，複数の基準がとられるのではないかと思う。適性・体力・根性および責任感等もまた重要な評価要素となるのである。企業では，これら個々の評価結果を相互に関連させ，人格的総合判断を下すことになるであろう。諸君の真価が顕現するのは，これからである。

そこで，私が諸君に希望するのは，過去はともあれ，新たな気持で出発して欲しいということである。また人格は仕事の中で形成されていくといわれる。これから諸君は，それぞれが置かれる職域において，広く勉強すべきであると思う。外国につぎのような金言がある。

「人間には3種類のタイプがある。(1)自分から学ぶ人は賢人である。(2)他人から学ぶ人は才人である。(3)何ものからも学ばない人は愚かな人である。」

第3のタイプの人間がふえつつあるとすれば，由々しい問題である。また現在の社会において超人や哲人は，これらを期待すべくもない。われわれは第2のタイプの人間を目標とすべきであろう。ともかく一生，学ぶことを忘れてはならないと思う。

諸君が経済学士の称号を取得されたことは誠に喜ばしい限りである。しかし，学歴社会の時代は今や反省を迫られている。とすれば，これからは実力の社会が訪れるであろう。社会の現実は内外において厳しい。諸君が諸君以外の人々から学ばねばならない事柄は，極めて多い。諸君以外の人々は，すべて諸君の師であるという姿勢を保持して頂きたいのである。

最後に，学び舎を巣立つ諸君の健康を切に祈念し，再会・再々会を約して擱筆する。

開拓者の言葉

理学部長　竹内　豊三郎

クラーク博士はアメリカのマサチュセッツ農科大学の学長であったが明治9年に札幌農学校の創設の任務をおび政府の要請で来日した。在任の期間はわずか一年であったが，この短い間に儒教的思想のなかに育って来た日本の若い学生達にキリスト教的禁慾主義と合理主義の精神を植えつけた。学校を去るとき30キロの長い道を馬に乗って見送った学生達にいった〝Boys，be ambitious！〟という言葉は大変有名であるが，それにつゞいた言葉については殆んど知られていない。それは〝not for money or for selfish aggrandizement，not for that evanescent thing which men call fame．Be ambitious for that attainment of all that a man ought to be.〟(青年よ大志を抱け，それは金銭や自分の慾望のためでも，世にいう名声というはかないものゝためでもない，男としてそうあらねばならないすべてのことを成し遂げるために大志を抱け，)という言葉である。後に続くこの言葉は大変重要で，これがなければクラークの精神を知ることは出来ない。創設時代の札幌は原野を一部切り開いた小さい町にすぎなかった。クラーク博士はアメリカの開拓時代を経験して同じ運命にある北海道に来たのであろう。当時16名にすぎなかった第1回の入学生をアメリカのFrontiers－men と同じ使命を持つと思ったにちがいない。彼は強い熱意と愛情で厳しい訓練を学生達に与えている。彼の精神に感動した学生達は卒業後に単に農業だけではなく宗教，教育，などの多方面にわたり明治文化の開拓者として活躍した。

それから100年の歳月がたった現在では学問の内容も大学の形態も大きく変わっている。また大学の数も学生の数も比較出来ない程の大きさになったから大学に入学した感激も，卒業するときの新しい使命感も，100年前に較べると小さくなっているように思われる。しかし，クラーク博士の精神は開拓時代の学生にのみ必要な言葉ではなく現在でも生きている言葉である。ケネディが大統領に就任した時の言葉〝Ask not what your country can do for you；ask what you can

do for your country．″（国家が諸君に与え得るものを求めるのではなく，諸君が国家に与え得るものを求めよ）もクラーク博士の精神と同じである。大学を卒業しようとするとき，このような開拓者精神を持って世の中に残る必要な何かを仕遂げるよう努力してほしいということを伝えておきたい。

工学部卒業生のみなさんに

工学部長　大井信一

今年も亦，300名をこえる学部卒業生と30数名の大学院修士課程修了生を社会へ送ることになり，この上ない喜びであります。それぞれ本人は勿論のことでしょうが，御両親や御家族の皆様方の喜びはさぞかしと存じます。昨年前半からの景気の上向きのせいか，就職状況は大変良好で卒業生諸君の顔も明るく御同慶の至りであります。大学卒業生の就職に関しては，このところ年ごとにUターン現象と言うか郷土指向が強くなっているのが全国的傾向の様である。工学部の本年度の求人数を見ると，学科によってかなりの差はあるが学生数の数倍から十倍近い数である。勿論いわゆる一流と言うか有名企業から中小企業までバラエティに富んでいるが，一人数社は受けられる数があり一見売手市場の観がある。然し近年の学生諸君の動向は，自宅から通勤できる就職先を希望するのが実情である。比較的工業県と言われ県内事業所の多い本県と言えども，毎年大学卒を採用する企業の数も収容力も小さい。収容力の大きい大工場もあるが，これらは本社採用が多く，どこに配属になるかわからない。県内に本社がある場合でも，県外配属をはっきり打出している場合は学生のほうから敬遠しがちである。したがって，県内にしか事業所を持たない中小企業となると限られて来るので狭き門になる傾向が強い。県外から来ている学生諸君についても同様で，全国何処へでもと言う気持はないようであり，自分の希望する地域に会社が見当たらない場合は，家族による郷土企業の掘り起こしに期待している。勿論，自分の希望する会社なら全国何処へでもと言う雄飛型がないわけではないが，年々数が減って行く様な気がして残念である。この様な現象は恐らく核家族で一人っ子が多いせいであろう。将来親の面倒を見なければならないのはやむを得ないとしても，そばにいなくては，毎日が淋しいと言うのもある。また今日の社会世相では，どんな突発的な人災や天災が起きるかも知れないので，遠く離れる事を親も子もいやがるのかも知れない。不透明な将来に期待するよりも現在の小成に安んじる気持もわからんではないが，少し気になる傾向である。然しその様な考えが極めて独断と偏見に満ちているのかも知れない。埃と危険がいっぱいのアスファルトジャングルより，緑に囲まれた，空気のうまい，潤いのある郷土を愛するが故の郷土定住思考かも知れない。

国立大学と言えども地方大学は，その地域社会の産業，文化，教育その他に密接に関連し，その発展に大きな貢献をすべきものと考えている。その意味では，卒業生が一人でも多く郷土に残ることが望ましい。地場産業の振興，中小企業の技術水準の向上，生活社会環境の整備等に大いに活躍してくれれば，その責任の一端を果たした事にもなる。然し，この傾向が今後ますます増大するものとすれば，収容力の飛躍的拡大が必要である。受け皿つくりに，産業界も大学も，地域社会も積極的に努力してもらわねばならない。卒業生諸君も後輩のために将来一肌ぬいでもらいたい。

今冬の「56豪雪」は38年以来と言われたが，県民に警告と教訓を残した。富山県だけの被害でも一千億円をこえたと伝えられる。産業界でも，工場の除雪は勿論，国鉄その他の交通機関の乱れから原料，資材などの搬入，製品の輸送に重大な影響を受け，生産，流通活動がまひした様である。この様なことでは企業の誘致などおぼつかないどころか，現在あるものでも逃出す心配がある。何とかして，この雪の対策を真剣に考えねばならない。これは一富山県のみの問題ではない。北陸三県を中心に日本海側諸県の宿命であり，日本全国としても大きな問題である。地形，気象その他の天然自然条件の改変や制禦は困難であるにしても，除雪消雪の技術開発，雪崩その他の雪害対策等は緊急な問題である。県内県外にかゝわらず工学部卒業生諸君のこれらの問題に対する精力的な対応に期待する。

□□□昭和56年4月1日退・辞職者□□□

○昭和56年4月1日限り停年により退職

教育学部　文部教官　教授　坂井誠一
経済学部　文部教官　教授　植村元覚
工 学 部　文部教官　教授　井上　浩

○昭和56年4月1日付辞職

人文・理学部　文部事務官　作業員長　増山繁次郎
教 育 学 部　文部事務官　作業員長　辻沢弥八郎
工　学　部　文部技官　営繕工　松丘　健治

史林彷徨46年

教育学部教授　坂　井　誠　一

私は本年4月1日付をもって本学を停年退官することになりました。本学発足当初から在任しておりましたので，こんにちまで32年，さらに本学に包摂された旧制富山高等学校教授の期間をも含めると，実に38年の長きにわたり本学の御厄介になりました。このあと何年生きられるかわかりませんが，いわば人生の大半を本学ですごしたことになりますので，いまここに本学を去るに当り，多少の感慨なきを得ません。

本学では，言うまでもなく，歴史学担当の教官としてすごして参りました。私と歴史学との関わりは，昭和10年東大文学部国史学科入学以来ですから，爾来46年にわたってこの道を歩み続けてきました。原始林の如く無限に続く史林を，恩師や先学に導かれながら，私なりの小径を見出し，一歩一歩踏み固めてきたつもりですが，いま振り返ってみると，その小径はまことに細く曲りくねっており，時には途絶えがちになっております。30年にわたって蓄積した研究成果を踏まえて，この近年発表し，学界でも一定の評価をうけた「加賀藩改作法の研究」も，研究史の上では正当に位置付けされながら，新たな視点をもった研究者によって，鋭く切りこまれつつあります。まことに厳しい学問の世界です。

私はこのように，研究者としては史林を歩み続けてきましたが，いっぽう昭和18年からは，教育者として旧制高校と大学に所属してきました。この方では，あくまでも誠実に学生諸君に対してきたつもりですが，歴史家としてよりもさらに自信がなく，何程の成果があったか全くわかりません。でも，時々旧い卒業生に会って旧懐を叙する機会があり，彼等の社会人として立派に成長し，それぞれ一定の役割りを果している姿に接し，ほのかな喜びにひたることもあります。まことに教育者冥利というべきでしょうか。

ところで，私が大学教官としてすごした32年間を省みて，社会の如何なる職業の人よりも自由であったことに，最大の慶びを感じます。このことは，第三者よりみれば，或いは事実に反すると受けとめられるかもしれません。でも私自身にとっては，このことは真実そのものです。史林に踏みこんだ昭和10年から同20年に至るまでの戦時中の体験を想起する時，この〝自由〟の有難さが身にしみます。

でも，この〝自由〟は，真実と正義に裏付けされない限り，永続することは難しいでしょう。私は本誌の26号と29号に書いた卒業生を送る言葉の中で，社会の現状を末法濁世と受けとめたが，この現状認識は，その後2～3年の間にますます強まって参りました。私がもっとも怖れるのは，真理探究の牙城であるべき大学もまた，この濁世の外に立ち得なくなることであります。

本学を去るに当って私の頭を去来するのは，教育基本法第1条にいう「真理と正義を愛し」と，同第2条にいう「学問の自由を尊重し」という2点であります。いまさら改まって教育基本法など持ち出すことは，唐突の感を脱かれないとは思いますが，卒直に現在の感懐をこの言葉に托したいと思います。

でも，私は幸福でした。皆さんのよせられたこれまでの御交誼を感謝します。有難う。さようなら。

定年を迎えて大学時代の想い出

経済学部教授　植　村　元　覚

定年を迎えて今は長い間大過なく勤めたことを有り難く思いかつ感謝している。私は京大をでて間もなく伊勢の神宮皇学館大学に勤めたが，戦後マッカーサー指令により廃止となり，次いで母校の旧制富山高校に

勤めた。母校の教壇にたつことには感激を覚えたが，食糧難のきびしい時で，校庭の一部の野菜畑の恩師たちの不慣れな農作業の姿には胸が痛んだ。

やがて学制改革で富山大学文理学部になり，この中に経済学科ができた。旧制高岡高商の復活であり，私は経済学の教官第1号になった。翌年に元高商の教授が数名着任された。それが今日の経済学部に充実したのを見ると感慨無量である。

この間，私は主に北陸の地場産業を流通論の立場から研究してきた。その業績は著書類（翻訳や編著を含めて）25冊，論文類111編を数える。一つ一つに思い出はつきない。中でも富山売薬業は，江戸後期に全国市場を確保し，薬の豊富な今日も存続する。この当時の「多国籍企業」の成立の原因を究明してきたが，それは経営の比類なき巧みさにあり，恰もフランス17世紀のジャック・サバリーの名著「完全な商人」の経営の理想型に当たると規定できるようになった。商業の原点をもつともいえる。高岡の銅器も礪波の麻問屋も興味ある問題をもっている。

さて平凡な教員生活の中で強く印象に残ることは3つある。第1は，昭和30年わが国で最初に経営史の講義科目を本学に設け，講義をしたことであり，学問のパイオニア的気分を教壇で味わった。このことをハーバード大学のグラース教授に報告したら，喜びの手紙を下さり，日本における富大の学問の発展を励まされた。後年ハーバードに行ったときも後任のラーソン教授がミネソタから私を訪れてこられたことも懐しい。ここを中心に散在する行商人など小資本家の経営記録1,000点をゼロックスにして集めてきた。世界の代表的な行商人は二つあり，一つはヤンキーとよばれ，このコネチカットからフロンティアの農家に薬や日用品を行商し，開拓前線の確保に役立った。他は富山売薬人である。この比較研究を今後進めたい。

第2は図書館長の時である。東大，名大，阪大の館長は旧知の中であり，国立大学図書館協議会の役員にされた。役員は新制大学では私独りであった。情報処理の問題や岸本賞の選考等が主な任務であった。しばしば熱っぽいがスマートな区切りのよい会議がもたれた。岸本賞の受賞者は小規模の大学に少ないので，私は努力賞を加えることを提案したが，投票の結果は破れ，新制大学には惜しいことであった。この間よく図書館　や情報処理を勉強した。任期後，協議会長から役員としての尽力に対し感謝状を受けた。私が感謝状を貰うなどということは一生に唯一回のことであろう。

第3は47年秋に中日新聞社からシベリア経済調査団の団長として同地を回った時である。ノボシビリスクのソ連科学アカデミー副所長でシベリア開発計画担当のオゾロフ博士を訪ねたり，各地の大学や施設をまわった。イルクーツク商科大学では教授たちと地域開発や学生の勉学態度について話しあった。最後にハバロフスクで放送局からシベリアの感想を求められた。大学の印象やシベリアの開発，日ソ貿易問題を話した。深夜に英訳をそえて海外放送もされた。この体制の違う異国での放送も忘れ難い。

最後に，私の研究は流通論の理論よりも実践的であり，地域社会と関係が深い。通産省，建設省や中部開発センターまた県や市町の中小企業の問題や総合開発計画の会議に，たびたび出席し，多くの友人ができたのも楽しいことであった。

いま振り返ってみると，大学教官として精一杯の研究と教育に従事できたこと，またよき恩師，同僚，友人や学生に恵まれた事を改めて感謝したい。最近の宮本又次先生からの「年をとると案外勉強ができます」の手紙は，私にはこの上なく尊い励みである。

思　い　出

工学部教授　井　上　　浩

富山大学に30年の長きに亘り勤務して昔を偲ぶと新制大学発足当時の第1回卒業生からその童顔が浮んで来る。それらの人々のアルバムも手元の本棚にある。

この思い出は別として，その横に並ぶ数冊の本にも懐かしい思い出があるので，この本のささやかな思い出を綴り，退官にあたっての感想依頼に対する責を果たしたいと思う。

岡田幸雄先生の研究室において，回路網の接続にトポロジーを応用する研究と，非線型回路の研究がおこなわれようとし，文献調査の段階で，カウア原著の「沪波回路」を訳することになり，一部分担のすすめを載いた。沪波器の特性をチェビシェフ近似したときに生ずるパラメータを求めたもので，楕円関数など勉強になったが，これは共訳としてコロナ社から出版さ

れた。

翻訳許可依頼に対する原著者の返事として，現在600頁の交流回路なる本を著作中であるとして，朱筆の入った校正刷を送って戴いて感激した思い出がある。

あとで出版された交流回路の本は手に入ったが，今この本の表紙を見ると小さい紙がはってあり，図書名，許可者印とあり下に朱肉の印が押されている。これは応召中送られて来た品の中に誤って混入したもので所持品検査の時の用心のために所持許可をとった名残りである。佐渡相川の思い出である。

この「沪波回路」の訳本はいつの間にか紛失したが，日立製作所勝田工場で，これを見つけたとして卒業生の辻省吾君がコピーをとり送ってくれた。

もう一つの非線型回路の文献としては，東北大理，数の蟻坂仲明先生より「非線型力学の新方法」（クリロフ，ボゴリゥボッフ共著）を借用し，少しあとで，九州大学理，北川敏男先生より「非線型力学入門」（同上共著）を借用することが出来た。何分初めての露文なので大分苦労した思い出がある。後者はあとで電々の通研で研究資料にされた由であり，又原本は英訳され，日本では英訳の方を知って居られる方が多い。

岡村進先生はダール原著の「演算算法と演算子法」が簡にして要をえた本として推奨され，訳されていたが中途健康を害されてそのままとなって居られた。佐野ラインの佐野鉄太郎先生より勉強のためとおすすめがあり，残りを訳し，コロナ社から出版して戴いた。

永井健三先生が終戦後学術振興会で99小委員会（同期の研究）を主催され，その仕事の中に非線型回路の研究をも含められた。図書出版費をえて，「同期の研究」としてまとめられ，丸善ＫＫより出版された。

このように数冊の本は今にもバラバラになりそうであるけれども，このような恩師，先輩の勉学への励ましとして，我が支となり力となって来た。現在に至って今は，後に続く人々を励ます年令に至っている。新制大学の発足当時とくらべて比較にならない程，研究なり，勉学なりが行い易くなっているので，将来は大きく伸びるであろうし，又発展を期待してやまない。

新　任　教　官

○神川　康子　講　師（教育学部）　55. 11. 1
昭52. 3　奈良女子大学大学院家政学研究科修士課程修了
担当：家庭管理

○小倉　利丸　講　師（経営短期大学部）　55. 4. 1
昭55. 3　東京大学大学院経済学研究科博士課程単位取得退学
担当：経済学

○寺西千代子　助　手（経営短期大学部）　55. 4. 1
昭55. 3　大阪市立大学大学院経営学研究科後期博士課程退学
担当：経営学

○芳賀　健一　講　師（経営短期大学部）　55. 9. 16
昭52. 3　東北大学大学院経済学研究科博士課程単位取得退学
担当：金融論

１０年ぶりの故郷

教育学部講師　神川（かみかわ）　康子

高校卒業後，故郷富山を離れ，奈良で約10年の学生時代を過したあとに，こうして，思いがけず故郷の大学で仕事ができるようになったことは，私にとって，本当に夢のようです。しかも，附属の小・中学校の時に，憧れをもち，幼な心に将来の夢をもつ切っ掛けとなった教生先生‥‥その先生を目指す教育学部の学生の方がたと　これからは共に勉強や研究ができるのかと思うと，奈良での長い学生生活や，主婦兼業としては忙しすぎた，研究生活と　掛持ち講師の両立も，全て無駄ではなかったんだなという気持になってきます。

「石の上にも３年」という諺があります。私は挫けそうになるとき，いつもこの諺を思い浮べます。しかし，現代のように，目まぐるしい社会では，３年なんて，あっという間に過ぎてしまうようです。３年位で諦めて，転職したり，離婚をしたり，別の人生をと，あっさり方向転換をしてしまう話を時どき耳にします。ある女性の転職雑誌の売れ行きが目覚ましいということでも，どうやら，さっさと，潔く，見切をつける人生が推奨される傾向もあるようです。しかし，こんな時だからこそ，じっくり腰を据えて将来を見極めていかなければならないのではないでしょうか。私は，いま，戸惑いながらの道ではあったけれど，ふり返えっ

てみて，石の上にも10年だなと，思いなおすことにしました。仕事でも，研究でも，人間関係でも，10年努力すれば，いくらかは確かなものになるだろう‥‥と。限りがあるとは言え，一生懸命生きれば長い人生です。10年単位の努力をしても惜しくはないでしょう。

私は，いま，不安に満ちた駆出し講師ですが，10年経ったら，少しは先生らしく自信もつくだろうかと，自分を励まして，努力することにしました。

現在，学生である皆さんは，なおさらのこと，これからが，一番充実した10年を期待できる時だと思います。どうか，永い目で自分の人生を見つめて，努力を惜しまないでください。お互いにがんばりましょう。

10年ぶりに故郷に帰えり，少しだけ，人生に落着きをみつけた，今日この頃の私の心境です。

こんな私の思いがけない帰郷のせいでしょうか‥‥この冬は，大変な大雪でした。　　2月14日記

新任の挨拶

教養部講師　八木保夫

昨年11月に，こちらに転居してきて2か月余りが経ち，漸く大学内部や市内の情況など大方の見当が附くようになりました。それにしても，この間の環境・心境の変化は相当のものだったと実感しています。というのも，一つには，神奈川県の湘南地方で生まれて育ち，後に横浜に移りましたが，これまで一度も神奈川県外に住んだことがなく，こちらに来たのが県外に出た最初の体験だったということ，それも，色々な事情から，約2週間という短期間に移らねばならなかったことなどがあり，これに加えて，移転直後の18年ぶりの豪雪の襲来，といった工合で，いわばdouble shockならぬtriple shock という状態の下におかれたからです。

そうは言つても，人間の精神的・思想的基盤は，どこであろうとそれ程変わるはずのないもの，諸先生方や職員の方々とは，これまでと同様「誠あるところ信あり」を信条に，お附合をさせて頂きたいと思っております。

ところで，富山という土地柄から受けた印象は，前方は，ばい貝・あま海老・ずわい蟹等，独特の海の幸を産み出す日本海，背後は，我国屈指の雄大な山容を持つ立山に囲まれ，厳しくも風情溢れる冬の雪，その雪解け後にやって来る素晴しい春，など四季の変化に富む風土，といったものですが，このような土地柄が，地元の人々にどのような心理的・精神的影響を与えているか，そして地域の社会的・行政的・政治的機構，作用にどのような特徴をもたらしているかが，非常に興味のあるところです。専攻する法律学の観点からは，差当たり，こうした身近な問題意識を法学的に考察するところから始めて，徐々に諸外国にまで範囲を広げ，特にA. V. Dicey, H. W. R. Wade , J. F. Garner等の法思想の書物を渉猟し，古典をひもとくこととしたいと思います。学生諸君と共に歩むことを忘れずに‥‥‥。

太閤山からの眺望

経営短期大学部講師　小倉利丸

富山に引越してから1年になる。都会育ちの私にとっては豊かな自然と新鮮な食べ物は得難い貴重なものに思われる。太閤山の近くから呉羽にかけて一直線にのびるサイクリングロードからの立山連峰の景観の雄大さは，見飽きることがない。

反面，富山の1年間の生活は，富山という＜地方＞都市が，多分に高度成長の歪みを増幅させているのではないかという実感をもたざるをえなかった。太閤山団地というのはそのいい例だろう。この団地は私の様な自転者利用者，歩行者には「陸の孤島」に等しい。

元来商品経済の発達は市場の拡大を招き，市場の拡大は＜地域＞の自立性を奪い，＜地域＞を近代国家の枠組に統合してゆく。この近代化を背後で支えたのが交通機関の発展だったといえる。そして生産一流通を貫くテクノロジーの巨大化と再生産空間の拡散は，管理システムの強大化を招く。戦後の高度成長は，解体された＜地域＞に替って，モータリゼーションを前提とした人工的な＜区域＞（ベッドタウンとかニュータウン等々）を簇生させた。この＜区域＞は，その内での行動を基本とする歩行者にとっては，生活空間としてのまとまりを欠く不便なものでしかない。人間の行動空間ではなく自動車の行動空間が，生活空間の基準

となってしまうのである。太閤山団地とはまさにこの高度成長の象徴の様に思われる。富山の自然の豊かさが，景観としてのそれにとどまり，生活の豊かさに必ずしも結びついていないのは，残念なことである。

新　任　雑　感

経営短期大学部講師　芳　賀　健　一

昨年の９月下旬に仙台から富山に移ってきた。まだ５か月しかたっていない。これまでの僕の生活の大半は，いわば黒板に向かって費やされてきたようなものだが，富大にきてはじめて黒板を背にして過ごすことになった。黒板を軸にしたこの位置の反転は大きい。けれど，セーターにＧパンという外見は学生時代といっこうに変わっていないから，年長者もまじる短大生のなかでは，教師として目立つことはほとんどないようだ。

富大への就職がきまったとき，教師稼業については多少の想像力が働いたものの，北陸での生活や，夜間の短期大学部の何たるかは皆目見当がつかなかった。着任早々の富山の第一印象は，静かな，のんびりした町だというものだったが，半年ちかく暮らしてみても，この月並な印象を変えたくなるような目にあっていない。短大については，まず小雨降るなかでのにぎやかな短大祭が記憶に新しい。しかし何よりもうれしかったのは，半期の特殊講義をつうじて，熱心な学生の存在を知ったことであった。今年はゼミをもたなかったので，学生との接触は比較的少なかったとはいえ，来年度も短大生にたいするこの判断が変わることはないと思っている。

雑　　感

経営短期大学部助手　寺　西　千代子

私が大阪から富山に来て，この四月で一年になる。このごろでは富山弁のアクセントにも慣れ，影響をうけやすい私としては会話の中に富山弁が時々登場することもある。人をよけなければ歩くことのできない都会の雑踏から逃がれ，この一年間はある意味で安堵感につつまれた生活を送ることができた。その中でもとくに安らぎを与えてくれたのは，やはり立山連峰のすばらしい眺めであったろう。四季おりおり，見るたびに新鮮な感動があるが，私が好きなのは雪におおわれた山々である。夏には観光客で満員になる立山も，冬にはその威厳とでも言おうか，人を近づけさせなくなる。そんな山を見ると，手にとどかないところにいってしまったような寂しさと，自然のままそっとしておきたいような気持ちにさせられる。北陸特有の曇りがちの日が続いたあとに，雪におおわれた立山連峰が青空にくっきりと浮かんだ姿は，何ともいえずすばらしい。これが，毎日晴天続きであったらどうであろうか。多分このような感動はおこらないであろう。北陸の気候の中でこそ立山は最も美しいのではないだろうか。

昨年は立山と薬師岳の頂きに立つことができた。今年は，冬でもその岩肌をみせ，山の厳しさが伝わってくるような気のする剣岳に是非登りたいと思っている。立山連峰の中で私が最も好きな山に。

アメリカから富山大学に留学して

国費外国人留学生（研究留学生）（理学部生物学科）　Marc Lamphier

去年の三月文部省の奨学金で富山大学に留学することになった一週間後，ＮＨＫ国際短波放送を夜中の二時頃聞いたことがあった。放送中で富山地方が紹介された。先ず，魚船から伝えられる海上の寒風の音，早朝に働く魚民の叫び声，次に農作業中のおばあさんの富山弁混じりの話などと，色々と富山県の様子が描かれた。丑満時に地球の反対側から伝わって来たこの番組を夢中になって聞いたことは，今とても懐しい思い出になった。十月に自分の目で初めて見た富山の印象は大分頭の中のイメージと違ったのは当然だが，一月に入ってやっと私の想像通りの富山になった。東京で正月を過して戻ったら富山が真っ白い雪の一面に塗られ，全く夢のように一変していた。以来近年にない豪雪に苦しめられた富山の人々には済まないが，私には

自然の威力をよく感じた　思い出深い冬であった。

私はBoston市の出身で，Indiana州のEarlham大学という，学生千人位の小さな大学を卒業した。私の大学は日本との関係が昔から深く，日本通の教授，日本人留学生，日本育ち米人学生などが多く，日本語を頻繁に耳にするし，日本の新聞，雑誌も図書館に揃えてある。この環境の中で生物学を専攻しながら日本語の学習もできた。二年生の時，早稲田大学国際学部に留学したが，授業は全部英語なのでそれ程留学という事にはならなかった。今度富山大学で日本語で勉強できるのでとてもいい経験になった。現在，研究生として理学部の小林貞作先生の下で遺伝学の研究と物理学の授業で頑張っている。

四ケ月富山大学で過ごした感想として長所も色々あるが，一つだけ短所を挙げれば日本の大学はアメリカに比べてかなり官僚的な気がする。これは特に大学の図書館に感じたことがある。貸出しの期間や冊数等限られているし，本の大部分が学生の目に見えない所に仕舞ってある等，少し閉鎖的と言えるだろう。この前の学園ニュースに二神先生がよく論説なさったと思うが，大学の図書館は学生に親しみのある，使いやすい，親切な所であるべきで，大学教育に重要な役を果す施設に違いない。

最近，春の到来を仄めかすようなやや暖かい風がキャンパスに流れ込んで来た。大学メインストリートに並んでいるユリの木の花盛りと，山への採集を楽しみにしている。これからも，富山大学に留学したこの折角の機会を利用して，日本語を学び，北陸の旅をし，思い出深い経験になるように努力したいと思う。

昭和55年度　教員養成課程　合宿研修を終えて

五箇山実行委員長　坂本博昭：鹿島荘実行委員長　松下昇司

わが教育学部は，去る10月20，21日の両日にわたり合宿研修を実施しました。今回は，五箇山青少年旅行村と能登の鹿島荘に分れて実行されました。

五箇山の方は，『教官と学生，学生間の親睦を計る』という目標だったのですが，教育実習からの解放という意味合いが強くなった様に感じました。一日目，出発当初に心配されていた雨も上がり　各コースに分れて活動しました。ハイキング，社会学習，陶芸，民謡講習，写生の5コースがあったのですが，皆それぞれ精一杯に活動していた様に見受けられました。中でも陶芸は，時間を惜んで，一陶芸家になった様に作品の制作に打ちこんでいたのが印象的でした。

夕食は初の試みである野外炊飯を実行しました。各班によって料理の味には差異はあったものの，充実感には差異がなかった様でした。

夜は恒例のキャンプファイヤーを行いました。各班の趣向を凝らした出し物で例年になく盛り上がりました。

二日目は，初日のリクレーション的傾向からがらりと様相を変え，討論会を行いました。内容は教育的なものだけに止まらないようにと思いましたが，やはり教育実習の反省や最近の教育に関するものが中心となったようでした。そして，時間的制約があったにもかかわらず，各グループの話し合いが充実していたように思われました。

一泊二日という日程のため，参加者にとってはとても慌しかったのではなかったかと思いますが，今まで交流の少なかった同朋との会話や活動はいろんな面で参考になったのではないでしょうか。

鹿島荘では，この合宿を教育実習の反省会から実習の骨休め，つまり，リクレーション的要素の強いものにしようということで企画されていきました。初日は，2時間1単位とする計4時間の間，水泳，たこ作り，ゲーム，写生の4つのグループに分かれて活動しました。夜は，恒例のキャンプファイヤー，また初の試みである肝試し，そして班ごとのアトラクションを含む交歓会など数多くの楽しい催物が消化されました。

二日目は，ガラッと様相を変え，教育に関しての内容で，班ごとの討論会が行われました。

最後に，その報告会，教官，学生，実行委員の挨拶という手順で合宿の幕は降ろされました。

「こんな楽しい合宿なら，度々あっても良い。」と皆口々にもらし，本当に楽しくて有意義な合宿であったようです。

例年，教育実習の反省会的傾向の強かったこの合宿研修を，今回の様に二分化し，学生の自主的計画性を重視した点それ自身にはまだいろんな反省点はあるにしても有意義であったように感じられました。来年度は今回の反省点や長所を取り入れて，もっとすばらしく有意義な合宿研修にしてほしいと思います。

学部だより

◇人文学部だより

○和崎洋一教授『スワヒリ語ー日本語辞典』刊行される

書名は"KAMUSI YA KISWAHILI-KIJAPANI"。人類学のフィールドワークを通してスワヒリの世界に住む著者の，スワヒリ語（東アフリカ・タンザニヤの共通語）の紹介をかねた，活きた辞典。約12,000語収載。表紙見返しに著書のスケッチがある。文部省科学研究費刊行助成金による出版。養徳社刊。15,000円

○矢沢英一助教授『「三人姉妹」演出ノート』（ゲオールギイ・トフストノーゴフ著）を翻訳刊行される

ボリショイ・ドラマ劇場の演出家である著者の，「三人姉妹」の舞台稽古日記と，演出論「古典と時代感覚」からなる。訳者の付けられた副題「チェーホフ演劇の今日性」により，翻訳の意図は明瞭である。白馬書房刊。1,500円。

学生部だより

◇体育系サークルリーダー研修会について

本年度の研修会は，金沢大学辰口共同研修センターを会場として実施され，多数のサークル学生が参加した。今回は，天候にも恵まれ2泊3日の間，和気あいあいのうちにも活発な意見交換がなされ，研修会も盛会に終了することができました。

○実施概要

期　日　昭和55年11月22日(土)～24日(月)〔2泊3日〕
場　所　石川県能美郡辰口町旭台
　　金沢大学辰口共同研修センター
研修生　体育会役員及び運動部リーダーの学生約80名
指導助言者　学生部長　教　授　岩渕　富治
　　教育学部　〃　田中　久雄
　　〃　助教授　中川　孝
　　〃　〃　山下　三郎
　　〃　〃　横山　泰行
　　教養部　教　授　有沢　一男
　　〃　〃　稲垣　保彦

研究項目

1. クラブ活動の目的・意義について
2. クラブ活動におけるリーダーはどうあるべきか
3. クラブのかかえている問題点について

講　演　〃科学的トレーニング方法〃

（教育学部助教授　山地啓司）

◇スキー講習会について

本年度のスキー講習会は，去る1月7日から13日までの1週間にわたり，白銀招く志賀高原ブナ平スキー場を中心として行われた。

特に今年は豪雪のため実施が危ぶまれる点もあったが，無事終了することができました。

これはひとえに指導教官並びに体育会の諸君の尽力によるものと深く感謝いたします。

◇スキー講習会に参加して

4班　経済3年　中西　裕美

今年は例年にない大雪で，富山大学恒例のスキー講習会も講習場である志賀高原に無事到着できるのだろうかと去年まではなかった心配がありました。国鉄，バスの都合で参加できない人も一割前後いたようでした。ただ出発の日の朝，降り続いていた雪の切れ間にちょっと顔を出した太陽を見て，いい予感を感じつつ志賀高原に向かうバスに乗り込みました。

予定よりも大幅に遅れて宿泊所に着きましたが，今まで敵であった雪もここでは仲間であり，雪不足の去年と違って絶好のコンディションです。到着した次の日は久しぶりの快晴で，青空の下でスキー講習が始まりました。お互いに面識がないことから来る緊張と，スキー上達への期待がからみ合って初日は興奮気味でしたが，夕食後出来たての班のメンバーと先生との間で自己紹介などもあり少しずつ雰囲気が打解けて来ました。二日目も前日に引続き快晴で，もう二日前までの雪，雪の天気はすっかり忘れ，慣れも手伝って余裕が出て来ると回りの景色がようやく目に入るようになりました。標高の高い西館山へリフトで登っている時にふと空を見上げると，今まで見たこともない色をした空が目に入り，思わず「わー」と叫んでしまいました。コバルトブルーとか青色とかという濃さではなく群青色というか紺色というか，まるで陽が沈んだ後，だんだん闇が迫って来て，夕焼けの明るさが全くなくなった時の空の色のようでした。西館山からの眺めもすばらしく，雪を被った白馬連峰を眼下に，華麗にとはいきませんが何とか滑って下りられるのは気持ちのよいもので，滑り下りた後，下から滑って来た山を見上げて空が近いこの大きな山をエンジンのついた車なんか使わずスキーだけで滑ってきたのかと一人で感激したりもしました。

3日目ともなるとそれぞれのメンバーの滑り方にも差が出始めます。メンバーの一人はスランプの状態で，

このスランプは私が去年陥ったものと同じでした。滑走の絶体量の不足からくるもので，頭ではわかっていても体が思うとおりに動いてくれないというものです。自分はもうこれ以上上手になれないのではないか，先生も先輩もいろいろ注意して下さるが私のこの不安な気持はわからないだろうと悪い方にばかり考えていました。シーズンオフの後，今年に入って滑ってみると，去年スランプに陥りながらも何日も滑ったせいか，あれだけ恐しく感じてころんでばかりいた斜面に対して，どう滑ったらいいか体が少し分ってくれたようで出口が見えた思いがしました。3日目の夜，先生が班の1人1人について注意をして下さった時，このことを話しスランプに陥っている人の気持がよくわかると言うと，先生は「みんなわかるんだよ。誰もが一度は通るんだよ」と言って下さいましたが，その時，「みんなもそうだったのか，同じなんだなあ」と急にスキーに対して親近感が湧いて来たのでした。

4日目，5日目はひどい吹雪になり，膝以上の新雪に埋まって滑ったり，吹き上げてくる雪やガスで5メートル先が見えなかったりという雪山のきびしい自然条件の下での講習でしたが，講習が終わり，大きいストーブの回りで暖まりながら自分の班や他の班の人達と話していると，フッとそれまでの緊張が緩んで疲れも飛んでいく感じでした。

スキーは一度始めたらやめられないと言われましたが，この講習会をきっかけにしてますますスキーに取りつかれてしまったようです。

◇学生証の査証について

1，2，3年次生は，各学部の学務係（教養部においては学生係）で，昭和56年度の査証を行いますので必ず受けてください。

なお，査証を受けない学生証は無効となります。

◇昭和56年度　富山大学入学志願者数調

学部	学科・課程	昭和55年度 募集人員	昭和55年度 志願者数	昭和55年度 倍率	昭和56年度 募集人員	昭和56年度 志願者数	昭和56年度 倍率	備考
人文学部	人文学科	80	316	3.95	90	316	3.5	（56年度10名増募）
	語学文学科	80	219	2.74	80	148	1.9	
	計	160	535	3.34	170	464	2.7	
教育学部	小学校教員養成課程	140	302	2.16	140	293	2.1	
	中学校教員養成課程	50	146	2.92	50	133	2.7	
	養護学校教員養成課程	20	115	5.75	20	66	3.3	
	幼稚園教員養成課程	30	110	3.67	30	145	4.8	
	計	240	673	2.80	240	637	2.7	
経済学部	経済学科	120	295	2.46	120	260	2.2	
	経営学科	120	480	4.00	120	360	3.0	
	経営法学科	60	130	2.17	60	120	2.0	
	計	300	905	3.02	300	740	2.5	
理学部	数学科	40	104	2.60	40	96	2.4	
	物理学科	40	75	1.88	40	69	1.7	
	化学科	40	70	1.75	40	82	2.1	
	生物学科	30	56	1.87	30	75	2.5	
	地球科学科	30	57	1.90	30	78	2.6	
	計	180	362	2.01	180	400	2.2	
工学部	電気工学科	50	133	2.66	50	93	1.9	
	工業化学科	45	238	5.29	45	158	3.5	
	金属工学科	40	213	5.32	40	136	3.4	
	機械工学科	50	145	2.90	50	104	2.1	
	生産機械工学科	40	134	3.35	40	133	3.3	
	化学工学科	40	127	3.17	40	92	2.3	
	電子工学科	40	155	3.88	40	64	1.6	
	計	305	1,145	3.75	305	780	2.6	
合計		1,185	3,620	3.05	1,195	3,021	2.5	

◇学園ニュース編集委員

学生部長　教授　岩渕富治　　人文学部　教授　山口　博　　教育学部　教授　大塚恵一
経済学部　〃　棚田良平　　理学部　〃　松本賢一　　工学部　〃　市村昭二
教養部　〃　奥貫晴弘